

日本原子力研究所(東海) ○鈴木雅秀 深谷清 奥達雄

1. 緒言: 現在、原研において研究開発中の多目的高温ガス実験炉は、圧力容器に $2\frac{1}{4}$ Cr-1Mo鋼が使われることが予定されている。この圧力容器は、使用温度が、400°C前後となることが予想されるため焼きもどし脆化が、使用中に生ずる問題の1つと考えられる。特に我々のグループでは、実験炉使用条件下での脆化を評価するため、中性子照射或いは応力⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾が加わった場合の脆化の程度を調べてきたが、特に応力の付加は、脆化を促進する効果のあることがわかった。今回は、 $2\frac{1}{4}$ Cr-1Mo鋼の焼きもどし脆化現象に見られた異方性について、特に応力付加に伴なう脆化の負荷方向依存性について報告する。

2. 実験方法

使用した材料は $2\frac{1}{4}$ Cr-1Mo鋼の焼きならし・焼きもどし材(NT材)で、Table 1に試料の化学分析結果を示す。焼きも

どし脆化のための処理としては、450°C 3000時間の等温脆化処理及び、G E タイプのステップクーリング処理を行った。応力を付加するためには、

断面60×12mm、平行部長さ480mmの試験体を作製し、210 MPa の応力で、450°C、3000時間の時効を行った。脆化の程度は、主として、シャルピー試験を行うことにより評価し、試験片は、Fig 1に示すように採取した。

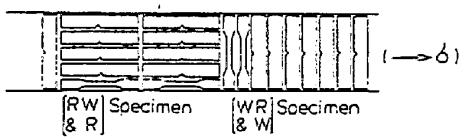


Fig.1 Specimen sampling

3. 実験結果

本実験条件の範囲内で、次のような結果が得られた。

(1)焼きもどし脆化の程度は、素材からの採取方向に対して、依存性を示す。既ち、最終圧延方向に対して平行に採取したRW材の脆化が、垂直に採取したWR材に比べて、著しい。

(2)応力の付加を行うと、応力付加方向に平行に採取した試料の脆化が促進されるが、垂直に採取した試料には、この促進効果は見られない。(以上Fig 2参照)

(3)室温での引張試験では著しい変化は見られなかった。

(4)応力を付加した場合の脆化も、可逆性のものであることが認められた。(Fig 2)

(5) (1)(2)の脆化の異方性に関しての考察を行った。

4. 参考文献

- (1) 奥、深谷 鉄と鋼 VOL67.(1981)S438
- (2) 鈴木、深谷 鉄と鋼 VOL67.(1981)S437
- (3) 鈴木、深谷他 JAERI-M 9150

embrittling treatments & charpy specimen orientation	Transition temperature		Upper shelf energy
	50E-15f	50Z fibrocity	
As received	RW -94 WR -89	-74 -72	247 247
450°C, 3000h	RW -78 WR -84	-56 -57	24.6 24.6
575°C, 1h, de-embrittled	RW -96 WR -84	-40 -38	24.0 24.0
210MPa, 450°C, 3000h	RW -72 WR -84	-58 -57	24.9 24.9
575°C, 1h, de-embrittled	RW -93 WR -84	-48 -46	24.1 24.1
Step cooling	RW -79 WR -84	-58 -40	24.4 24.2
	-100 -90 -80 -70 -60 (°C)	-80 -70 -60 -50 -40 (°C)	22 24 25 (KJ/m²)

Fig.2 Transition temperatures and upper shelf energies before and after various treatments.